

ひとまち
まち

川越から世界へ

セラミックカップ・ジャパン開催



セラミックカップとは、17歳以下を対象にした国際的なハーレンフースバル(室内サッカー)の大会です。来年1月にドイツで行われるこの大会の日本予選が、8月20日から26日まで川越水上公園で開催されました。



優勝した東京ヴェルディチーム



選手交代は何度でも自由ですが、ゲームの中断はなく、壁を飛び越えてフィールドに入っていきます



激しいシヨルダーチャージ



竹田剛さん(左)と松井光之さん(右)

ハーレンフースバルとは、キーパーを含めた5対5の室内サッカーで、ルールはほぼサッカーと同じ。フィールドはサッカーの半分くらいの広さで、試合時間は予選リーグ十二分、決勝リーグは十四分と短い、フットサルに似た競技です。違いは、フィールドの周囲に高さ1mほどの壁があること。ボールが壁を越えてフィールド外に出ない限り、途切れることなくスピード感あふれるゲームが続きます。

全国から高校のサッカー部やクラブチームの二十四チームが参加し行われた日本予選。六チームごとに四ブロックに別れ、一次予選の上位三チームが準決勝リーグに、準決勝リーグの上位三チームが決勝リーグに進むことができます。それぞれ総当たりの戦いでドイツでの世界大会の切符を争うこの大会。川越からは県立川越高校サッカー部と川越水上公園のフットボールクラブが参加しました。

「周囲の壁を利用したパスでゲームを組み立てるのが魅力。全国レベルのチームと対戦し、勝利したことが自信になりました」と県立川越高校の松井光之さん(高校1年生)。

「川越でこのような全国大会が開催されるのがうれしいです。今後も引き続き開催してほしいですね」と同校竹田剛さん(高校1年生)。

日本では、まだなじみの薄いハーレンフースバル。「次の世代を担う高校生などに、世界を身近に感じてほしい。川越を世界大会にチャレンジできる場としていきたい」と実行委員長の中嶋譲さんは話してくれました。

セラミックカップ日本予選会が川越で開催され、今年で三回目。この競技が全国に広がり、川越がその聖地となる日が来るかもしれません。

きもので来てね



チラシは観光案内所などで配布しています

「川越きもの日」を制定した川越きもの日実行委員会。初回となる8月18日に、川越駅と本川越駅でPRしました。着物姿で配布したチラシには、着物の方を対象に、市内約70の協賛店で利用できる特典内容が書かれています。毎月18日は、皆さんも着物を着て市内を散策してみませんか。



空手道の全国大会に出場

「戦隊のヒーローになった気分でした」と空手道をはじめた幼稚園のころの思いを語る川添聖太くん(初雁中学校2年生・氷川町)。中学では空手道部がないため野球部に在籍、部活の合間を利用し練習をつづけ、埼玉県代表として念願の全国大会に出場しました。相手を想定した技の正確性とスピードは、誰にも負けない自信があります。「自分が納得できる形が決まり勝利したときはうれしいです」と川添くん。「来年も全国大会に出場し勝ち進みたい」と目を輝かせていました。

大きな釜にびっくり

市内の小学校20校、約12,000人分の給食を作っている菅間学校給食センター。8月18日、同センターで見学会が開催されました。ふだん見ることのできない調理室や大きな洗浄機に、参加者は興味津々。1回に約850人分の調理ができる釜で、本物そっくりで作られた野菜などの具を容器に移す体験コーナーが人気。「給食は苦手なものもあるけど、もっと好きになりそう」と濱野達也くん(小学2年生・古谷)は話してくれました。



花は20cmほどの高さで、ランのような上品な香りがします

黄色いサトイモの花が咲きました

須永富夫さん(73歳・新宿町5丁目)宅の家庭菜園で栽培しているサトイモが花をつけました。40年以上栽培をしていて初めての出来事。サトイモはほとんど花をつけず、国内での開花はとても珍しいとのこと。暑い日には1日でおれてしまいます。「花に気づいたのは8月中旬。始めは葉かと思っていたものが、黄色く色づきだし花だと思いました」と須永さん。



手話って楽しいね

8月3日・4日・5日に霞ヶ関公民館で、「夏休み子ども手話教室」が開催されました。「手話を体験し、将来に役立ててもらえれば」と講師の新井イサエさん(霞ヶ関東4丁目)。「手話で、耳の不自由な人とあいさつをしてみたい。困っているときに助けてあげたいです」と参加した大釜啓輔くん(小学4年生・的場1丁目)は、話してくれました。

